

11/18(火)織物体験 ワークショップ飯坂温泉 建物探訪

第1部

10:00-12:00

工房おりをり 織物体験ワークショップ

(参加者：9名)



①「茂庭のしなだ織」はシナノキの樹皮を剥いで糸を紡ぐ古代織。実際に使用できる織機はとても貴重。

②「真綿」は、蚕の繭を煮て引き延ばし、綿状にした細くて軽く光沢のある糸。

③④裂織の様子 古布を細く裂いてリボン状にした布を緯糸（よごい）とし、経糸の間を通して織り進めると、思いもよらぬ表情が生まれるのが楽しい。SDG s・サステイナブルの観点からも日本伝統のアップサイクル方法として見直されている。

工房おりをりを主催されていらっしゃる鈴木 美佐子先生は、東日本大震災後「福島は蚕の卵から養蚕、織物まで一連の仕事が残る貴重な場所」として福島の絹、真綿の魅力を発信しています。

また、日本三大古代布の「しなだ織」はシナの木の樹皮を使った織物でその貴重な織物の伝承、保存にも力を入れてもらっています。今回は、着物や古い布を裂いてリボン状の布を織る「裂き織りコースター」と貴重な古布である「しなだ織り」そして福島県産の真綿から作る「真綿パフ」より希望の織物を作成しました。

皆さん、織機を使い1列1列織り進むにつれて夢中になり、それぞれに素敵な作品を織りあげることができました。

日本だけではなく海外へも出向くことのある鈴木先生は「絹の魅力を知れば知るほど楽しくて仕方がない！」と笑顔でお話をされていらっしゃる姿が印象的でした。

第2部

飯坂温泉の歴史に売れる建物探訪

(参加者：10名)

14:00-16:00



飯坂温泉には、「旧堀切邸」や「なかむらや旅館」、「旧採進堂酒店」「堀切邸」など国の登録有形文化財に指定されている歴史的な建造物が残されています。また、明治の姿を再現し建築された「鯖湯」飯坂温泉の歴史を現代に伝えるこれらの建物の建築企画、設計、工事監理に携わられた鈴木勇人さんのご案内にて飯坂温泉の魅力あふれる建物を巡りました。

「鯖湯」は、明治時代の共同浴場ができる限り再現しており、材料も当時と同じ材を使用しているとのこと。脱衣所と浴室の間に仕切りを設けないスタイルも保健所とのやりとりにより、苦労の末に実現したそうです。

次に訪れた「なかむらや旅館」は、明治23年創業。赤瓦白壁土蔵造りの建物は国登録有形文化財に指定されている。

東日本大震災で被災し倒壊の危機を乗り越え、耐震補強を施し、再生された建物を七代目の阿部 寛さんにご案内頂きました。

江戸時代に建築された「江戸館」と明治時代に増築された「明治館」で構成されており、銘木と言われる「紫檀」「黒檀」「鉄刀木」や「黒柿」など貴重な材を使用した書院造の床の間や美しいガラス絵の洗面・トイレなど、随所に美へのこだわりと匠の技を感じることができる建物でした。

「採進堂酒店」は国登録文化財の建物で明治時代に建てられた地区136年の建物である。外観や店舗部は当時の姿を生かし、1階を角打ちスタイルの福島の地酒とおつまみを提供する店舗として、店舗以外の1階を共有スペース、2階部は、宿泊施設として活用されています。オーナーの浪木 克文さんは、飯坂の街を歩き、温泉や食を楽しむ拠点として活用ていきたいとのことです。

11/18(火)会員交流会・11/19(水)三浦工匠店見学

11/18(火) 18:00- 会員交流会 (参加者: 14名)

会員の皆様による飯坂温泉にて織物体験と建物探訪を終え、場所を穴原温泉「渓苑 花の瀬」へ移し、会員と賛助会員による交流会を開催いたしました。美味しい料理に舌鼓を打ちながら、それぞれに1年の振り返りと来年の抱負を語り合い、和気あいあいと交流を深めつつ、楽しい時間を過ごすことができました。



11/19(水) 10:00-11:30 伝統的な木造建築の匠 工房見学 (参加者: 9名)



①②木造建築で用いる道具を説明して頂きました。昔は丸太を1本1本をこのような道具で削り、柱や梁にしていたことを考えると気の遠くなるような大変な作業だということがわかります。

③仕口や継手の実物を拝見させて頂きました。

継手・仕口は、木を彫りパズルのように、金物を使わずに木材同士を接合する技で日本の木造建築において古くから受け継がれてきた技術である。この技を継承すべく、若い社員の方が働いていらっしゃいました。

④樹齢数百年の貴重な木材が、自然乾燥で保存されていました。

翌日19日は、雪化粧された吾妻山の麓に位置する「有限会社 三浦工匠店」を見学させて頂きました。

日本の伝統的な木造建築の技術を伝承し、様々な歴史的な建造物の修復や管理、新数寄屋造の住宅を活かした建物の建築に携わられていらっしゃます。

前日に訪れた「やかむらや旅館」「採進堂酒店」「旧堀切邸」は、三浦工匠店のお力により修復された建物です。

最初に会長の三浦 藤夫さんに木の特性や伝統的な木造建築についてお話を伺いました。

その中で「ヒノキ材は伐採してから約200年までの間強度が増す」ということや「杉は柱、ヒノキはどこに使用しても良い、松は横架材として使用する」など貴重なお話を伺いました。

その後、代表取締役の三浦 慶顕さんより木造建築に使用される道具や仕口や継手について実物を拝見しながら、ご説明頂きました。仕口や継手を用いることにより金物に頼らず、木材同士を直接かみあわせることにより、強固な接合を実現することができます。

その技術だけではなく、接合部の美しさに改めて木造建築の匠の技を感じることができました。

最後に、床柱の中でも天然の杉絞りと人口の杉絞りの違いや樹齢数百年の貴重な木材を拝見させて頂きました。